

農業経営基盤の強化の促進に関する

基本的な構想

平成 28 年 12 月

鴻 巣 市

## 第1 農業経営基盤の強化の促進に関する目標

1. 鴻巣市は、埼玉県ほぼ中央に位置し、市内の農業地の大半が水陸田であることから、本市の農業は米麦を主体とした土地利用型農業経営を中心に首都 50 km圏内という地理的条件を活用した花き、果樹、施設野菜等集約型農業が盛んである。

今後、都市近郊型農業として、花き等の集約型農業については、広域的・安定的な市場の確保や、付加価値の向上等により「産地」として地域間競争に耐えうる生産組織の強化育成を図りつつ、「花のまち鴻巣」としてのPRを推し進める。また、土地利用型農業者との農地の貸借等により、営農意欲の高い耕種農家への農地の利用集積を図り、経営指導等これら農業者の体質強化を図ることによって、地域複合としての農業発展をめざす。

また、このような農業生産展開の基盤となる優良農地の確保を図ることを基本として、農業振興地域整備計画に即し、引き続き、農村地域の秩序ある土地利用の確保に努めるものとする。

2. 鴻巣市の農業構造については、首都圏に位置するため都市化が進み、恒常的勤務による兼業農家が多く、そういった状況下において現在の主たる農業従事者の高齢化や若者の農業離れによる担い手不足が深刻化している。

また、こうした中で、農地の資産的保有傾向が強くなり、安定兼業農家から規模拡大指向農家への農地の流動化は顕著を見ないまま推移してきたが、農業の経営形態が、大規模専業化と兼業化の2分化傾向にあり、今後、規模拡大を指向する農家への利用権設定を中心に農地の流動化が進む可能性が高まっている。

一方、市内一部の地域においては、農業就業人口の高齢化及び減少に伴って、農業後継者に継承されない又は担い手に集積されない農地で一部遊休化したものが近年増加傾向にあることから、これを放置すれば担い手に対する利用集積が遅れるばかりでなく、周辺農地の耕作にも大きな支障を及ぼすおそれがある。

3. 鴻巣市はこのような地域の農業構造の現状及び見通しの下に、農業が職業として、選択し得る魅力とやりがいのあるものとなるよう、将来（概ね10年後）の農業経営の目標を明らかにし、効率的かつ安定的な農業経営を育成することとする。

具体的な経営指標は鴻巣市及びその周辺市町村において現に成立している優良な経営の事例を踏まえつつ農業経営の発展を目指し、農業を主業とする農業者が地域における他産業従事者並の年間農業所得（主たる従事者1人あたり560万円程度）、年間労働時間（主たる従事者1人あたり1800時間程度）の水準を実現できるものとし、また、これらの経営が鴻巣市の農業生産の相当部分を担う農業構造を確立していくことを目指す。

4. 鴻巣市は、将来の鴻巣市の農業を担う若い農業経営者の意向その他農業経営に関する基本的条件を考慮して、農業者又は、農業に関する団体が地域の農業の振興を図るために自主的な努力を助長することを旨として、意欲と能力のある者が農業経営の発展を目

指すに当たってこれを支援する農業経営基盤強化促進事業その他の措置を総合的に実施する。

まず、鴻巣市は農業協同組合、さいたま農林振興センター等が十分なる相互の連携の下で濃密な指導を行うため、鴻巣市担い手育成協議会を設置し、集団段階または地域における農業の将来展望とそれを担う経営体を明確にするために徹底した話し合いを促進する。更に望ましい経営を目指す農業者や、その集団及びこれらの農家に対して上記の鴻巣市担い手育成協議会が主体となって営農診断、営農改善方策の提示等を行い、地域の農業者が主体性をもって自らの地域の農業の将来方向について選択判断を行うこと等により、各々の農業経営改善計画の主体的な作成や相互の連携が図られるよう誘導する。

次に、農業経営の改善による望ましい経営の育成を図るため、土地利用型農業による発展を図ろうとする意欲的な農業者に対しては、農業委員などによる掘り起こし活動を強化して、農地の出し手と受け手に係る情報の一元化把握の下に両者を適切に結びつけて利用権設定等を進める。

また、これらの農地の流動化に関しては、既に鴻巣市内のいくつかの営農集団等で行われている集団的土地利用を範としつつ、このような土地利用調整を全市的に展開して、集団化、連担化した条件で担い手に農用地が利用集積されるよう努める。

水田農業等土地利用型農業が主である集落で、効率的かつ安定的な農業経営の育成及びこれらの経営への農用地の利用集積が遅れている集落の全てにおいて、地域での話し合いと合意形成を促進するため、農用地利用改善団体の設立を目指す。また、地域での話し合いを進めるに当たっては、認定農業者の経営改善に資するよう団体の構成員間の役割分担を明確化しつつ、認定農業者の育成、集落営農の組織化・法人化等地域の实情に即した経営体の育成及び農用地の利用集積の方向性を具体的に明らかにするよう指導を行う。特に、認定農業者等担い手の不足が見込まれる地域においては、特定農業法人制度及び特定農業団体制度の普及啓発に努め、集落を単位とした集落営農の組織化・法人化を促進するため、農用地利用改善団体を設立するとともに、特定農業法人制度及び特定農業団体制度に取り組めるよう指導、助言を行う。

さらに、このような農地貸借による経営規模拡大と併せて、農作業受託による実質的な作業単位の拡大を促進することとし、公益社団法人埼玉県農林公社と連携を密にして、農地貸借の促進と農作業受委託の促進が一体となって、意欲的な農業経営の規模拡大に資するよう努める。また、併せて集約的な経営発展を助長するため、さいたま農林振興センターの指導の下に既存施設園芸の作型、品種の改善による高収益化や新規作目の導入を推進する。

また、生産組織は、効率的な生産単位を形成する上で重要な位置づけを占めるものであると同時に、農地所有適格法人等の組織経営体への経営発展母体として重要な位置づけを持っており、オペレーターの育成、受委託の促進等を図ることにより地域及び営農

の実態等に応じた生産組織を育成するとともに、その経営の効率化を図り、体制が整ったものについては法人形態への誘導を図る。

さらに、市内の農業生産の重要な担い手である女性農業者については、農業経営改善計画の共同申請等の推進を通じ、女性の農業経営への積極的な地域農業への参加・協力を促進する。

なお、効率的かつ安定的な農業経営と小規模な兼業農家、生きがい農業を行う高齢農家、土地持ち非農家等の間で補助労働力の提供による役割分担を明確化しつつ、地域資源の維持管理、農村コミュニティの維持が図られ、地域全体としての発展に結びつくよう、効率的かつ安定的な農業経営を目指す者のみならず、その他サラリーマン農家等にも本法その他の諸施策に基づく農業経営基盤の強化及び農業構造の再編の意義について、理解と協力を求めていくこととする。

特に、法第12条の農業経営改善計画の認定制度については、本制度を望ましい経営の育成施策の中心に位置づけ、農業委員会の支援による農用地利用のこれらの認定農業者への集積はもちろんのこと、その他の支援措置についても認定農業者に集中的かつ重点的に実施されるよう努めることとし、市が主体となって関係機関、関係団体にも協力を求めつつ制度の積極的活用を図るものとする。

さらに、地域の面的な広がりを対象とした構造改善事業の実施にあたっては、当該実施地区において経営を展開している認定農業者にも十分配慮し、事業の実施がこのような農業者の経営発展に資するよう、事業計画の策定等において経営体育成の観点から十分な検討を行う。

5. 鴻巣市は、鴻巣市担い手育成協議会において、認定農業者又は今後認定を受けようとする農業者、生産組織等を対象に経営診断の実施、先進的技術の導入等を含む生産方式や経営管理の合理化等の経営改善方策の提示等の重点的指導及び農協単位の研修会の開催等をさいたま農林振興センター等の協力を受けて行う。

6. 新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保に関する目標

(1) 新規就農の現状

鴻巣市の平成25年の新規就農者は3人であり、過去5年間ほぼ同じ状況である。

本市農業の維持・拡大を図っていくため、将来にわたって地域農業の担い手を安定的かつ計画的に確保していく必要がある。

(2) 新たに農業経営を営もうとする青年等の確保に関する目標

(1)に掲げる状況を踏まえ、鴻巣市は青年層に農業を職業として選択してもらえ

よう、将来（農業経営開始から5年後）の農業経営の発展の目標を明らかにし、新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保を図っていくものとする。

#### ア 確保・育成すべき人数の目標

国が掲げる新規就農し定着する農業者を年間1万人から2万人に倍増するという新規就農者の確保・定着目標や埼玉県農業経営基盤強化促進基本方針に掲げられた新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保目標280人を踏まえ、鴻巣市においては年間5人の当該青年等の確保を目標とする。また、現在の雇用就農の受け皿となる法人を5年間で10法人に増加させる。

#### イ 新たに農業経営を営もうとする青年等の労働時間・農業所得に関する数値目標

鴻巣市及びその周辺市町の他産業従事者や優良な農業経営の事例と均衡する年間総労働時間（主たる従事者1人あたり1800時間程度）の水準を達成しつつ、農業経営開始から5年後には農業で生計が成り立つ年間農業所得（3に示す効率的かつ安定的な農業経営の目標の5割程度の農業所得、すなわち主たる従事者1人あたりの年間農業所得250万円程度）を目標とする。

### (3) 新たに農業経営を営もうとする青年等の確保に向けた鴻巣市の取組

上記に掲げるような新たに農業経営を営もうとする青年等を育成・確保していくためには就農相談から就農、経営定着の段階まできめ細やかに支援していくことが重要である。そのため、就農希望者に対して、農地については農業委員会や農地中間管理機構による紹介、技術・経営面についてはさいたま農林振興センター、さいたま農業協同組合、ほくさい農業協同組合の生産組合等が重点的な指導を行うなど、地域の総力をあげて地域の中心的な経営体へと育成し、将来的には認定農業者へと誘導していく。

### (4) 地域ごとに推進する取組

#### ア 鴻巣地域

従来からの基幹作物である米・麦・花き・果樹・野菜等を栽培する鴻巣地域において、新たに農業経営を営もうとする青年等の受入れを重点的に進め、さいたま農業協同組合、各種生産組合等と連携し、栽培技術の指導や販路の確保を行い、当該青年等であっても一定の所得の確保ができ、安定的な経営を行えるように推進する。

#### イ 吹上地域

鴻巣地域と同様に基幹作物である米・麦を中心とした農業経営からさいたま農業協同組合、各種生産組合等と連携し、栽培技術の指導や販路の確保を行い、当該青年等であっても一定の所得の確保ができ、安定的な経営を行えるように推進する。

#### ウ 川里地域

鴻巣地域、吹上地域と同様に基幹作物である米・麦・花き・野菜等を中心とした栽培から、畜産農家もあり、ほくさい農業協同組合、埼玉県農業大学校や県の試験場、さいたま農林振興センターと連携し、新技術の導入を取り入れ近代的営農が可能になるよう環境を整え、新規就農施策を重点的に推進する地域として進めていく。

## 第2 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事者の態様等に関する営農の類型ごとの効率的かつ安定的な農業経営の指標

第1に示したような目標を可能とする効率的かつ安定的な農業経営の指標として、現に鴻巣市における主要な営農類型についてこれを示すと次のとおりである。

【個別経営体】

(農業経営の指標)

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
主穀 単一	<p>〈基幹作目〉</p> <p>水稲 12 ㍓</p> <p>大豆 3 ㍓</p> <p>小麦 12 ㍓</p> <p>大麦 3 ㍓</p> <p>〈経営規模〉</p> <p>15 ㍓</p>	<p>資本装備)</p> <p>作業場兼車庫 100 m<sup>2</sup></p> <p>トラクター 2 台</p> <p>田植機 1 台</p> <p>コンバイン 1 台</p> <p>農用自動車 2 台</p> <p>高速施肥田植機 乗用型 1 台</p> <p>ドリルシーダー</p> <p>パソコン 1 式</p> <p>〈経営条件〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同一経営者との組作業により作業効率を向上</li> <li>・農用地利用集積事業による面的集積</li> <li>・農地情報システムを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る</li> <li>・青色申告の実施</li> <li>・市況予測、販売、経営管理にパソコンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休日制の導入</li> <li>・農繁期における臨時雇用者の確保による荷重労働の防止</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
主穀 複合	<p>〈基幹作目〉</p> <p>水稲 7 ㍎ 小麦 3 ㍎ 苗物 パソゾー 10 ㍎ ベゴニア 10 ㍎ マリコールト 20 ㍎</p> <p>〈経営規模〉</p> <p>水稲 7 ㍎ ビニールハウス 1,000 m<sup>2</sup> 路地 1,000 m<sup>2</sup></p>	<p>〈資本装備〉</p> <p>ビニールハウス 1,000 m<sup>2</sup> 作業場兼車庫 120 m<sup>2</sup> トラクター 田植機 コンバイン トラック</p> <p>〈経営条件〉</p> <p>・主穀部門の協業化</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る</li> <li>・青色申告の実施</li> <li>・市況予測、販売、経営管理にパソコンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休日制の導入</li> <li>・農繁期における臨時雇用者の確保による荷重労働の防止</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
キュウリ 複合	〈基幹作目〉 きゅうり 促成 3,000 m <sup>2</sup> 抑制 3,000 m <sup>2</sup> 水稲           7 畝  〈経営規模〉 7.3 畝	〈資本装備〉 ビニール温室       2 棟 3,000 m <sup>2</sup> 作業場兼車庫 120 m <sup>2</sup> 自動カーテン装置 炭酸ガス発生機 温風暖房機 かん水施設 田植機 コンバイン トラック  〈経営条件〉 ・主穀部門の協業化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る</li> <li>・青色申告の実施</li> <li>・市況予測、販売、経営管理にパソコンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休日制の導入</li> <li>・農繁期における臨時雇用者の確保による荷重労働の防止</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
なし 複合	<p>〈基幹作目〉</p> <p>なし 1 ㌥</p> <p>幸水 50 ㌥</p> <p>ハウス 10 ㌥</p> <p>路地 40 ㌥</p> <p>豊水 30 ㌥</p> <p>新高 20 ㌥</p> <p>水稻 3 ㌥</p> <p>〈経営規模〉 4 ㌥</p>	<p>〈資本装備〉</p> <p>作業場兼車庫 1 棟 120 m<sup>2</sup></p> <p>果樹棚鉄線鋼管パイ プ支持</p> <p>硬化フィルム鉄鋼 ハウス 1,000 m<sup>2</sup></p> <p>スピードプレイヤー 500 ㌥</p> <p>草刈機</p> <p>選果機</p> <p>多目的防災網施設</p> <p>トラクター</p> <p>自脱型コンバイン</p> <p>田植機</p> <p>〈経営条件〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>なしの棚施設は防 鳥、防雹を兼ねた多 目的防災網施設</li> <li>なし園はかん水施設 整備</li> <li>水田は 30～50 ㌥区 画</li> <li>水稻は営農集団との 組作業</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>複式簿記記帳の 実施により経営 と家計の分離を 図る</li> <li>青色申告の実施</li> <li>市況予測、販売、 経営管理にパソ コンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>休日制の導入</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
鉢物 経営	<p>〈基幹作目〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>サイリア</li> <li>メロイテス</li> <li>リーガベゴニア</li> <li>ミカーネーション</li> <li>ゼラニウム</li> <li>シクラメン</li> <li>ポインセチア</li> <li>アリアプシ</li> </ul> <p>〈経営規模〉</p> <p>ビニールハウス 3,000 m<sup>2</sup></p> <p>畑 0.3 畧</p>	<p>〈資本装備〉</p> <p>ガラス温室 4 棟 2,000 m<sup>2</sup></p> <p>ビニールハウス 2 棟 1,000 m<sup>2</sup></p> <p>作業場兼車庫 1 棟</p> <p>底面給水装置</p> <p>温風暖房装置</p> <p>用土混合機</p> <p>トラクタ</p> <p>トラック 2t</p> <p>堆肥舎 1 棟</p> <p>ポッティングマシン</p> <p>〈経営条件〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・土地の面的集積</li> <li>・施設は複合環境制御</li> <li>・施設鉢物は底面水栽培</li> <li>・山上げ等による生産、出荷調整、品質管理</li> <li>・パソコン等による市場情報管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る</li> <li>・青色申告の実施</li> <li>・市況予測、販売、経営管理にパソコンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休日制の導入</li> <li>・従業員の雇用</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
なし 単一	<p>〈基幹作目〉</p> <p>なし 1.2 畝 幸水 60 畝 〔ハウス 40 畝 路地 20 畝〕 豊水 40 畝 新高 20 畝</p> <p>〈経営規模〉 1.2 畝</p>	<p>〈資本装備〉</p> <p>スปีトプレーヤ テイラー 草刈機 トラック 選果機 作業場兼車庫 120 m<sup>2</sup> 貯水槽 多目的網施設 100 畝 ハウス 50 畝 温風暖房装置 5 台 燃料タンク 3 基 スプリンクラー 一式</p> <p>〈経営条件〉</p> <p>・ 棚施設は防鳥、防雹 等を兼ねた多目的防 災網施設</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 複式簿記記帳の 実施により経営 と家計の分離を 図る</li> <li>・ 青色申告の実施</li> <li>・ 庭先販売による 産地直売</li> <li>・ 市況予測、販売、 経営管理にパソ コンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 休日制の導入</li> <li>・ 労働のピーク時 は雇用労働力を 積極的に活用す る</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
水耕 みつ ば	<p>〈基幹作目〉 みつば 3,000 m<sup>2</sup></p> <p>〈経営規模〉 ビニールハウス 3,000 m<sup>2</sup></p>	<p>〈資本装備〉 作業場兼車庫 1棟 200 m<sup>2</sup> トラック 2t 1台 ビニールハウス 2棟 3,000 m<sup>2</sup> 複合環境制御装置 全自動養液循環装置 温風暖房機 予冷库</p> <p>〈経営条件〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年9作の周年栽培</li> <li>・施設は複合環境制御</li> <li>・養液管理は全自動化</li> <li>・パソコンの活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る</li> <li>・青色申告の実施</li> <li>・市況予測、販売、経営管理にパソコンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休日制の導入</li> <li>・農繁期における臨時雇用者の確保による荷重労働の防止</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
植木 複合	〈基幹作目〉 ツバキ 10 畝 ツツジ 10 畝 ベニカナメ 10 畝 ハナミズキ 10 畝 ケヤキ 10 畝 マキ 10 畝 ドウダンツツジ 10 畝 マツ 10 畝 モッコク 10 畝 水稲 4 畝 ビール麦 4 畝  〈経営規模〉 水田 4 畝 畑 2 畝	〈資本装備〉 作業場兼車庫 1 棟 200 m <sup>2</sup> トラクター 30ps 級 1 台 30ps 級 1 台 施肥田植機乗用型 4 条 1 台 ドリルシーダー 4 条 1 台 自脱型コンバイン 4 条 グレタンク付 1 台 動力噴霧器搭載型 300 リットル 1 台 ブームスプレーヤー 500 リットル 1 台 ダンプトラック 2t 1 台 ミスト温室 1 棟 100 m <sup>2</sup> ビニールハウス 1 棟 1,000 m <sup>2</sup> ホットベンチマシン  〈経営条件〉 ・ 基盤整備された 1 区画 30 畝の汎用水田で団地化 ・ 同一経営者と組作業で作業効率の向上 ・ 乾燥調整出荷には農協ライスセンターを利用 ・ 土地の面的集積 ・ 施設は複合環境制御装置 ・ 施肥かん水は自動装置 ・ パソコンの活用	・ 複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る ・ 青色申告の実施 ・ 市況予測、販売、経営管理にパソコンを活用	・ 休日制の導入 ・ 農繁期における臨時雇用者の確保による荷重労働の防止

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
養豚 複合	<p>〈基幹作目〉</p> <p>肉豚 1,100 頭</p> <p>水稲 2 ㌧</p> <p>小麦 2 ㌧</p> <p>〈経営規模〉</p> <p>繁殖豚 50 頭</p> <p>肉豚 500 頭</p> <p>水田 2 ㌧</p>	<p>〈資本装備〉</p> <p>作業場兼車庫 1 棟 300 m<sup>2</sup></p> <p>トラクタ 30ps 級 1 台 30ps 級 1 台</p> <p>施肥田植機乗用型 4 条 1 台</p> <p>ドリルシーダー 4 条 1 台</p> <p>自脱型コンバイン 4 条 ゲレタンク付 1 台</p> <p>動力噴霧器搭載型 300 リットル 1 台</p> <p>ブームスプレーヤー 500 リットル 1 台</p> <p>ダンプトラック 2t 1 台</p> <p>肥育豚舎 2 棟 1,500 m<sup>2</sup></p> <p>飼料タンク 5 基</p> <p>堆肥舎 1 棟 300 m<sup>2</sup></p> <p>〈経営条件〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基盤整備された 1 区画 30 ㌧の汎用水田で団地化</li> <li>・ 同一経営者と組作業で作業効率の向上</li> <li>・ 乾燥調整出荷には農協ライスセンターを利用</li> <li>・ 土地の面的集積</li> <li>・ 農業情報システムを活用</li> <li>・ パソコンの活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る</li> <li>・ 青色申告の実施</li> <li>・ 市況予測、販売、経営管理にパソコンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 休日制の導入</li> <li>・ 農繁期における臨時雇用者の確保による荷重労働の防止</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
鉢物 複合	<p>〈基幹作目〉</p> <p>ツバキ 10 畝 ツツジ 10 畝 ベニカナメ 10 畝 ハナミズキ 10 畝 ケヤキ 10 畝 マキ 10 畝 ドウダンツツジ 10 畝 マツ 10 畝 モッコク 10 畝 水稲 4 畝 ビール麦 4 畝</p> <p>〈経営規模〉</p> <p>水田 4 畝 畑 2 畝</p>	<p>〈資本装備〉</p> <p>作業場兼車庫 1 棟 200 m<sup>2</sup> トラクタ 30ps 級 1 台 30ps 級 1 台 施肥田植機乗用型 4 条 1 台 ドリルシーダー 4 条 1 台 自脱型コンバイン 4 条 ゲレタンク付 1 台 動力噴霧器搭載型 300 リットル 1 台 ブームスプレーヤー 500 リットル 1 台 ダンプトラック 2t 1 台 ミスト温室 1 棟 100 m<sup>2</sup> ビニールハウス 1 棟 1,000 m<sup>2</sup> ポットベンチマシン</p> <p>〈経営条件〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基盤整備された 1 区画 30 畝の汎用水田で団地化</li> <li>・ 同一経営者と組作業で作業効率の向上</li> <li>・ 乾燥調整出荷には農協ライスセンターを利用</li> <li>・ 土地の面的集積</li> <li>・ 施設は複合環境制御装置</li> <li>・ 施肥かん水は自動装置</li> <li>・ パソコンの活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る</li> <li>・ 青色申告の実施</li> <li>・ 市況予測、販売、経営管理にパソコンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 休日制の導入</li> <li>・ 農繁期における臨時雇用者の確保による荷重労働の防止</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
バラ 複合	<p>〈基幹作目〉</p> <p>バラ 2,000 m<sup>2</sup> 内訳 土耕栽培 2,000 m<sup>2</sup> 養液栽培 1,000 m<sup>2</sup></p> <p>水稲 2 畝 小麦 2 畝</p> <p>〈経営規模〉</p> <p>アクリルハウス 3,000 m<sup>2</sup></p> <p>水田 2 畝 畑 0.2 畝</p>	<p>〈資本装備〉</p> <p>作業場兼車庫 1 棟 200 m<sup>2</sup></p> <p>トラクタ 30ps 級 1 台 30ps 級 1 台</p> <p>施肥田植機乗用型 4 条 1 台</p> <p>ドリルシダー 4 条 1 台 自脱型コンバイン 4 条 グレタンク付 1 台</p> <p>動力噴霧器搭載型 300 リットル 1 台</p> <p>ブームスプレーヤー 500 リットル 1 台</p> <p>ダンプトラック 2t 1 台</p> <p>アクリルハウス 2 棟 3,000 m<sup>2</sup> 底面給水装置 温風暖房装置 冷蔵庫</p> <p>〈経営条件〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 基盤整備された 1 区画 30 畝の汎用水田で団地化</li> <li>・ 同一経営者と組作業で作業効率の向上</li> <li>・ 乾燥調整出荷には農協ライスセンターを利用</li> <li>・ 土地の面的集積</li> <li>・ 農業情報システムを活用</li> <li>・ 施設は複合環境制御装置</li> <li>・ 施肥かん水は自動装置</li> <li>・ パソコンの活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る</li> <li>・ 青色申告の実施</li> <li>・ 市況予測、販売、経営管理にパソコンを活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 休日制の導入</li> <li>・ 農繁期における臨時雇用者の確保による荷重労働の防止</li> </ul>

【組織経営体】

(農業経営の指標)

営農類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の態様等
主穀単一	<p>〈基幹作目〉</p> <p>水稻 20 ㍏  <small>ヘクタール</small></p> <p>小麦 25 ㍏  <small>ヘクタール</small></p> <p>大麦 10 ㍏  <small>ヘクタール</small></p> <p>ブロッコリー 3 ㍏  <small>ヘクタール</small></p> <p>〈経営規模〉</p> <p>38 ㍏  <small>ヘクタール</small></p>	<p>〈資本装備〉</p> <p>※大型機械化一貫体系</p> <p>トラクター 2 台</p> <p>田植機</p> <p>ドリルシーダー 生産</p> <p>運搬機 質管</p> <p>育苗ハウス 1 棟</p> <p>作業所</p> <p>移植機</p> <p>パソコン</p> <p>コンバイン</p> <p>〈経営条件〉</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・米麦 2 毛作体系</li> <li>・ほ場は 1 区画 30～100 ㍏</li> <li>・パソコンによる農地情報管理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・組織経営体の法人化</li> <li>・農閑期を利用して、園芸作物や路地野菜を作付け</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休日制の導入</li> <li>・農繁期における臨時雇用者の確保</li> <li>・労災保険の加入</li> <li>・主たる従事者＝2 名</li> </ul>

営農 類型	経営規模	生産方式	経営管理の方法	農業従事の 態様等
水産 養殖	〈作付面積等〉 小赤生産=0.3ヘクタール 更紗和金魚= 0年魚 0.2ヘクタール 1年魚 0.1ヘクタール 琉金類= 0年魚 0.2ヘクタール 1年魚 0.2ヘクタール  〈経営規模〉 養殖池 1.0ヘクタール	〈資本装備〉 ・養殖池 2.5a×16面 計40a ・養殖池 5.0a×12面 計60a ・井戸、給水設備 ・出荷選別用ビニールハウス鉄骨 1棟 ・作業室兼調餌、飼料庫 1棟 ・バッキ用ポンプ 28台 ・調餌用回転釜、攪拌機 1台等  〈その他〉 ・8～10品種の複合養殖 ・種苗の自家生産による一貫生産選抜飼育 ・計画的な周年出荷	・複式簿記記帳の実施により経営と家計の分離を図る ・青色申告の実施 ・パソコン利用の経営管理	・家族経営協定の締結に基づく給料制、休日制の導入

### 第3 新たに農業経営を営もうとする青年等が目標とすべき農業経営の指標

第1の6の(2)に示したような目標を可能とする、新たに農業経営を営もうとする青年等が目標とすべき農業経営の指標として、効率的かつ安定的な農業経営の目標の5割程度の農業所得、すなわち主たる従事者1人あたりの年間農業所得250万円程度を目標とする。

### 第4 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標その他農用地の利用関係の改善に関する事項

#### 1 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標

上記第2に掲げるこれらの効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標を将来の地域における農用地の利用に占めるシェア及び面的集積についての目標として示すと、概ね次に掲げる程度である。

なお、農用地の利用集積にあたっては、より効率的かつ安定的な営農を可能にするため、農地中間管理事業、農地中間管理機構が行う特例事業、利用権設定等促進事業、農用地利用集積円滑化事業等を活用し、面的なまとまりとなるよう努める。

#### ○ 効率的かつ安定的な農業経営が地域における農用地の利用に占める面積のシェアの目標

効率的かつ安定的な農業経営が地域の農用地の利用に占める面積のシェアの目標	備 考
48%	

#### ○ 効率的かつ安定的な農業経営が利用する農用地の面的集積についての目標

農地利用集積円滑化事業等の実施により効率的かつ安定的な農業経営における経営農地の面的集積の割合が高まるように努めるものとする。

#### 2 農用地の利用関係の改善に関する事項

##### (1) 農用地の利用状況及び営農活動の実態等の現状

鴻巣市の農業は米麦を主体とした土地利用型農業を中心に、首都圏50キロ圏内という立地条件を活用した花き、果樹、施設野菜等集約型農業が盛んであるが、農業従事者の高齢化や若者の農業離れによる担い手不足が深刻化してきている。また、農地の資産的保有傾向が強く、安定兼業農家から規模拡大志向農家への農地の流動は顕著を見ないまま推移してきたが、農業の経営形態が大規模専業化と兼業化の2分化傾向にあり、今

後、規模拡大を志向する農家への利用権設定を中心に農地の流動化が進む可能性が高まっている。

## (2) 今後の利用等の見通し及び将来の農用地利用のビジョン

今後は更に農業従事者の高齢化が進んでいくことが予想され、このままでは担い手が受けきれない農地が出てくることが予想される。そのため、担い手の育成及びそれらの者への農地の利用集積を推進するため施策・事業の実施を図っていく。

## (3) 関係団体等との連携体制

鴻巣市では、関係機関が有する農地の情報の共有化を目指し、地域の担い手への面的集積を促進するため、関係各課、農業委員会、農業協同組合、土地改良区、農地利用集積円滑化団体等が連携して施策・事業等の推進を実施する。

## 第5 農業経営基盤強化促進事業に関する事項

鴻巣市は、埼玉県が策定した「農業経営基盤強化促進基本方針」の第4「効率的かつ安定的な農業経営を育成するために必要な事項」の農業経営基盤強化促進事業の実施に関する基本的な事項に定められた方向に即しつつ、鴻巣市農業の地域特性、即ち、複合経営を中心とした多様な農業生産の展開や兼業化の著しい進行などの特徴を十分踏まえて、以下の方針に沿って農業経営基盤強化促進事業に積極的に取り組む。

鴻巣市は、農業経営基盤強化促進事業として、次に掲げる事業を行う。

- ① 利用権設定等促進事業
- ② 農地中間管理事業、農地中間管理機構が行う特例事業
- ③ 農地利用集積円滑化事業の実施を促進する事業
- ④ 農用地利用改善事業の実施を促進する事業
- ⑤ 受託を受けて行う農作業の実施を促進する事業
- ⑥ 農業経営の改善を図るための必要な農業従事者の養成及び確保を促進する事業
- ⑦ 新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保に関する事項
- ⑧ その他農業経営基盤の強化を促進するために必要な事業

これらの各事業については、各地域の特性を踏まえてそれぞれの地域で重点的に実施するものとする。

また、今後再ほ場整備事業の実施が見込まれる屈巢、広田地区においては、ほ場区画の大型化による高能率な生産基盤条件の形成を活かすため、利用権設定等の促進事業を重点的に実施する。特に、換地と一体的な利用権設定を推進し、土地改良区の積極的な取組によって担い手が連担的な条件下で効率的な生産が行えるよう努める。

更に、鴻巣市は地域の中心的な経営体に対して農業法人の設立についての啓発に務め、必要に応じ、農用地利用改善団体が特定農業法人制度及び特定農業団体制度に取り

組めるよう指導、助言を行う。

以下、各個別事業ごとに述べる。

## 1. 利用権設定等の促進事業に関する事項

### (1) 利用権の設定等を受ける者の備えるべき要件

① 耕作又は養畜の事業を行う個人又は農地所有適格法人（農地法（昭和27年法律第229号）第2条第3項に規定する農地所有適格法人をいう。）が利用権の設定等を受けた後において備えるべき要件は、次に掲げる場合に依りてそれぞれ定めるところによる。

ア. 農用地（開発して農用地とすることが適正な土地を含む。）として利用するための利用権の設定等を受ける場合、次の（ア）から（オ）までに掲げる要件のすべて（農地所有適格法人にあつては、（ア）、（エ）及び（オ）に掲げる要件のすべて）を備えること。

（ア）耕作又は養畜の事業の供すべき農用地（開発して農用地とすることが適正な土地を開発した場合におけるその開発後の農用地を含む。）のすべてを効率的に利用して耕作又は養畜の事業を行うと認められること。

（イ）耕作又は養畜の事業に必要な農作業に常時従事すると認められること。

（ウ）その者が農業によって自立しようとする意欲と能力を有すると認められること。

（エ）その者の農業経営に主として従事すると認められる青壮年の農業従事者（農地所有適格法人にあつては、常時従事者たる構成員をいう。）がいるものとする。

（オ）所有権の移転を受ける場合は、上記（ア）から（エ）までに掲げる要件のほか、借入者が当該借入地につき所有権を取得する場合、農地の集団化を図るために必要な場合、又は近い将来農業後継者が確保できることとなることが確実である等特別な事情がある場合を除き、農地移動適化あつせん譲受け等の候補者名簿に登録されている者であること。

イ. 混牧林地として利用するため利用権の設定等を受ける場合、その者が利用権の設定等を受ける土地を効率的に利用して耕作又は養畜の事業を行うことができることと認められること。

ウ. 農業用施設用地（開発して農業用施設用地とすることが適当な土地を含む。）として利用することができることと認められること。

② 農用地について所有権、地上権、質権、賃借権、使用貸借による権利又はその他の使用及び収益を目的とする権利を有する者が利用権設定等促進事業の実施により利用権設定等を行う場合において、当該者が前項のアの（ア）及び（イ）に掲げる要件（農地所有適格法人にあつては、（ア）に掲げる要件）の全てを備えているときは前項の規定にかかわらずその者は、概ね利用権の設定等を行う農用地の合計面積の範囲内で利用権の設定等を受けることができるものとする。

- ③ 農業協同組合法（昭和22年法律第132号）第10条第2項に規定する事業を行う農業協同組合又は農業協同組合連合会が利用権の設定等を受ける場合、同法第11条の31第1項第1号に掲げる場合において農業協同組合又は農業協同組合連合会が利用権の設定等を受ける場合、法第4条第2項に規定する農地中間管理事業を行う農地中間管理機構、同条第3項に規定する農地利用集積円滑化事業を行う農地利用集積円滑化団体又は独立行政法人農業者年金基金法（平成14年法律第127号）附則第6条第1項第2号に掲げる業務を実施する独立行政法人農業者年金基金が利用権の設定を受ける場合若しくは農地中間管理機構、農地利用集積円滑化団体又は独立行政法人農業者年金基金が利用権の設定等を行う場合には、これらの者が当該事業又は業務の実施に関し定めるところによる。
- ④ 賃借権又は利用貸借による権利の設定を受ける者が法第18条第2項第6号に規定する者である場合には、次に掲げる要件のすべてを備えるものとする。
- ア 耕作または養畜の事業に供すべき農用地（開発して農用地とすることが適当な土地を開発した場合におけるその開発後の農用地を含む。）のすべてを効率的に利用して耕作又は養畜の事業を行うと認められること。
- イ 鴻巣市長への確約書の提出や鴻巣市長との協定の締結を行う等により、その者が地域の農業における他の農業者との適切な役割分担の下に継続的かつ安定的に農業経営を行うと見込まれること。
- ウ その者が法人である場合にあっては、その法人の業務を執行する役員のうち一人以上の者がその法人の行う耕作又は養畜の事業に常時従事すると認められること。
- ⑤ 農地所有適格法人の組合員、社員又は株主（農地法第2条第3項第2号チに掲げる者を除く。）が利用権設定等事業の実施により、当該農地所有適格法人に利用権の設定等を行うため利用権の設定等を行う場合は、①の規定にかかわらず利用権の設定等を受けることができるものとする。
- ただし、利用権を受けた土地のすべてについて当該農地所有適格法人に利用権の設定等を行い、かつ、これら二つの利用権の設定等が同一の農用地利用集積計画において行われる場合に限るものとする。
- ⑥ ①から⑤に定める場合のほか、利用権の設定等を受けた後において備えるべき要件は別紙1のとおりとする。

## （2）利用権の設定等の内容

利用権設定等促進事業の実施により、設定（又は移転）される利用権の存続期間（又は残存期間）の基準、賃借の算定基準及び支払い（持分の付与を含む。以下同じ。）の方法、農業経営受委託の場合の損益の算定基準及び決済の方法その他利用権の条件並びに移転される所有権の移転の対価（現物出資に伴い付与される持分を含む。以下同じ。）の算定基準及び支払いの方法並びに所有権の移転の時期は、別紙2のとおりとする。

### (3) 開発を伴う場合の措置

- ① 鴻巣市は、開発して農用地又は農業用施設用地とすることが適当な土地についての利用権の設定等を内容とする農用地利用集積計画の作成にあたっては、その利用権の設定等を受ける者（地方公共団体、農地利用集積円滑化団体及び農地中間管理機構を除く。）から「農業経営基盤強化促進法の基本要綱」（平成24年5月31日付け24経営第564号農林水産省経営局通知。以下「基本要綱」という。）様式第7号に定める様式による開発事業計画を提出させる。
- ② 鴻巣市は、①の開発事業計画が提出された場合において、次に掲げる要件に適合すると認めるときに農用地利用集積計画の手続きを進める。
  - ア. 当該開発計画の実施が確実であること。
  - イ. 当該開発事業の実施にあたり農地転用を伴う場合には、農地転用の許可の基準に従って許可し得るものであること。
  - ウ. 当該開発事業の実施にあたり農用地区域内の開発行為を伴う場合には、開発行為への許可基準に従って許可し得るものであること。

### (4) 農用地利用集積計画の策定期期

- ① 鴻巣市は（5）の申出その他の状況から農用地の農業上の利用の集積を図るため必要があると認めるときは、その都度、農用地利用集積計画を定める。
- ② 鴻巣市は、農用地利用集積計画の定めるところにより設定（又は移転）された利用権の存続期間（又は残存期間）の満了後も農用地の農業上の利用を図るため、引き続き農用地利用集積計画を定めるように務めるものとする。

この場合において、当該農用地利用集積計画は、現に定められている農用地利用集積計画に係る利用権の存続期間（又は残存期間）の満了の日の30日前までに当該利用権の設定存続期間（又は残存期間）の満了の日の翌日を始期とする利用権の設定（又は移転）を内容として定める。

### (5) 要請及び申出

- ① 鴻巣市農業委員会は、認定農業者で利用権の設定を受けようとする者又は、利用権の設定等を行おうとする者の申出をもとに、農用地の利用権の調整を行った結果、認定農業者に対する利用権設定等の調整が整ったときは、鴻巣市に農用地利用集積計画を定めるべき旨を要請することができる。
- ② 鴻巣市の全部又は一部をその地区の全部又は一部とする土地改良区は、その地区内の土地改良法（昭和24年法律第195条）第52条第1項又は第89条の2第1項の換地計画に係る地域における農地の集団化と相まって農用地の利用の集積を図るため、利用権設定等促進事業の実施が必要であると認める時は、別に定める様式により農用地利用集積計画に定めるべき旨を申し出ることができる。
- ③ 農用地利用改善団体及び営農指導事業においてその組合員の行う作付地の集団

化、農作業の効率化等の農用地の利用関係の改善に関する措置の推進に積極的に取り組んでいる農業協同組合は、別に定める様式により農用地利用集積計画の定めるべき旨を申し出ることができる。

- ④ 鴻巣市の全部又は一部をその事業実施区域とする農用地利用集積円滑化団体は、その事業実施区域内の農用地の利用の集積を図るため、利用権設定等促進事業の実施が必要であると認めるときは、別に定める様式により農用地利用集積計画に定めるべき旨を申し出ることができる。
- ⑤ ②から④に定める申出を行う場合において、(4)の②の規定により定める農用地利用集積計画の定めるところにより利用権の存続を申し出る場合には、現に設定(又は移転)されている利用権の存続期間(又は残存期間)の満了の日の90日前までに申し出るものとする。

#### (6) 農用地利用集積計画の作成

- ① 鴻巣市は、(5)の①の規定による農業委員会からの要請があった場合には、その要請の内容を尊重して農用地利用集積計画を定める。
- ② 鴻巣市は、(5)の②から④の規定による農地利用集積円滑化団体、農用地利用改善団体、農業協同組合又は土地改良区からの申出があった場合には、その申出の内容を勘案して農用地利用集積計画を定めるものとする。
- ③ ①、②に定める場合のほか、利用権の設定等を行おうとする者又は利用権の設定等を受けようとする者の申出があり、利用権設定等の調整が整った時は、鴻巣市は農用地利用集積計画を定めることができる。
- ④ 鴻巣市は、農用地利用集積計画において利用権の設定等を受ける者を定めるにあたっては、利用権の設定等を受けようとする者(1)に規定する利用権の設定を受けべき者の要件に該当する者に限る。)について、その旨の農業経営の状況、利用権の設定等をしようとする土地及びその者の現に耕作又は養畜の事業に供している農用地の位置その他の利用条件等を総合的に勘案して、農用地の農業上の利用の集積並びに利用権の設定等を受けようとする者の農業経営の改善及び安定に資するようにする。

#### (7) 農用地利用集積計画の内容

農用地利用集積計画においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

なお、⑥のウに掲げる事項については、(1)の④に定める者がこれらを実行する能力があるかについて確認して定めるものとする。

- ① 利用権の設定等を受ける者の氏名又は名称及び住所
- ② ①に規定する者が利用権の設定等を受ける土地の所在、地番、地目及び面積(1)の④に定める者である場合については、賃借権又は使用貸借による権利の設定に限る。)
- ③ ①に規定する者に②に規定する土地について利用権の設定等を行う者の氏名又

は名称及び住所

- ④ ①に規定する者が設定（又は移転）を受ける利用権の種類、内容（土地の利用目的を含む。）、始期（又は移転の時期）、存続期間（又は残存期間）、借賃及びその支払い方法（当該利用権が農業の経営の委託を受けることにより取得される使用及び収益を目的とする権利である場合にあっては農業の経営の委託者に帰属する損益の算出基準及び決済の方法）、利用権の条件その他利用権の設定（又は移転）に係る法律関係
- ⑤ ①に規定する者が移転を受ける所有権の移転後における土地の利用目的、当該所有権の移転の時期、移転の対価及び（現物出資に伴い付与される持分を含む。）その支払い（持分の付与を含む。）その方法その他所有権の移転に係る法律関係
- ⑥ ①に規定する者が（１）の④に該当する者である場合には、次に掲げる事項
  - ア その者が、賃借権又は使用貸借による権利の設定を受けた後において、その農用地を適正に利用していないと認められる場合に、賃貸借又は使用貸借の解除をする旨の条件
  - イ その者が毎事業年度の終了後３月以内に、農業経営基盤強化促進法施行規則（昭和５５年農林水産省令第３４号、以下、「規則」という。）第１６条の２各号で定めるところにより、権利の設定を受けた農地で生産した作物やその栽培面積、生産数量など、その者が賃借権又は使用貸借による権利の設定を受けた農用地の利用状況について同意市町村の長に報告しなければならない旨
  - ウ その者が賃貸借又は使用貸借を解除し撤退した場合の混乱を防止するための次に掲げる事項
    - (ア) 農用地を明け渡す際の原状回復の義務を負う者
    - (イ) 原状回復の費用の負担者
    - (ウ) 原状回復がなされないときの損害賠償の取決め
    - (エ) 貸借期間の中途の契約終了時における違約金支払の取決め
    - (オ) その他撤退した場合の混乱を防止するための取決め
- ⑦ ①に規定する者の農業経営の状況

## (8) 同意

鴻巣市は、農地利用集積計画の案を作成したときは、（７）の②に規定する土地ごとに（７）の①に規定する者並びに当該土地について所有権、地上権、永小作権、質権、賃借権、使用貸借による権利又はその他の使用及び収益を目的とする権利を有する者のすべての同意を得る。

ただし、数人の共有に係る土地について利用権（その存続期間が５年を超えないものに限る。）の設定又は移転をする場合における当該土地について所有権を有する者の同意については、当該土地について２分の１を超える共有持分を有する者の同意を得ることで足りるものとする。

(9) 公告

鴻巣市は、農業委員会の決定を経て農用地利用集積計画を定めたとき又は、(5)の①の規定による農業委員会の要請の内容と一致する農用地利用集積計画を定めたときは、その旨及びその農用地利用集積計画の内容のうち(7)の①から⑥までに掲げる事項を鴻巣市の掲示板へ掲示により公告する。

(10) 公告の効果

鴻巣市が(9)の規定による公告をしたときには、その公告に係る農用地利用集積計画の定めるところによって利用権が設定され(若しくは移転し)又は所有権が移転するものとする。

(11) 利用権の設定等を受けた者の責務

利用権設定等促進事業の実施により利用権の設定等を受けた者は、その利用権の設定等に係る土地を効率的に利用するように務めなければならない。

(12) 紛争の処理

鴻巣市は、利用権設定等促進事業の実施による利用権の設定等が行われた後は、賃借又は、対価の支払い等利用権の設定等に係る土地の利用に伴う紛争が生じた時には、当該利用権の設定等の当事者の一方又は双方の申出に基づき、その円満な解決に努める。

(13) 農用地利用集積計画の取消し等

- ① 鴻巣市の長は、次に掲げる事項のいずれかに該当するときは、(9)の規定による公告のあった農用地利用集積計画の定めによるところにより賃借権又は使用貸借による権利の設定を受けた(1)の④に規定する者に対し、相当の期限を定めて、必要な措置を講ずべきことを勧告することができるものとする。
  - ア その者が、その農用地において行う耕作又は養畜の事業により、周辺の地域における農用地の農業上の効率的かつ総合的な利用の確保に支障が生じているとき。
  - イ その者が、地域の農業における他の農業者との適切な役割分担の下に継続的かつ安定的に農業経営を行っていないと認められるとき。
  - ウ その者が法人である場合にあっては、その法人の業務を執行する役員のいずれもがその法人の行う耕作又は養畜の事業に常時従事していないと認めるとき。
- ② 鴻巣市は、次に掲げる事項のいずれかに該当するときは、農業委員会の決定を経て、農用地利用集積計画のうち当該各号に係る賃借権又は使用貸借による権利の設定に係る部分を取消すものとする。
  - ア (9)の規定による公告があった農用地利用集積計画の定めるところによりこれらの権利の設定を受けた(1)の④に規定する者がその農用地を適正に利用し

ていないと認められるにもかかわらず、これらの権利を設定した者が賃貸借又は使用貸借の解除をしないとき。

イ ①の規定による勧告を受けた者がその勧告に従わなかったとき。

③ 鴻巣市は、②の規定による取消しをしたときは、農用地利用集積計画のうち②のア及びイに係る賃借権又は使用貸借による権利の設定に係る部分を取消した旨及び当該農用地利用集積計画のうち当該取消しに係る部分を鴻巣市の公報に記載することその他所定の手段により公告する。

④ 鴻巣市が③の規定による公告をしたときは、②の規定による取消しに係る賃貸借又は使用貸借は解除されたものとみなす。

## 2. 農地中間管理事業、農地中間管理機構が行う特例事業の実施の促進に関する事項

(1) 鴻巣市は、農地中間管理機構との連携の下に、普及啓発活動等を行うことによって同公社が行う事業の実施の促進を図る。

(2) 市、農業委員会、農業協同組合、農地利用集積円滑化団体は、農地中間管理機構が行う事業を促進するため、農地中間管理機構に対し、情報提供及び事務の協力を行うものとする。

## 3. 農地利用集積円滑化事業の実施の促進に関する事項

(1) 鴻巣市は、鴻巣市の全域又は一部を区域として農地利用集積円滑化事業を行う農地利用集積円滑化団体との連携の下に、農用地等の所有者、農業経営者等の地域の関係者に農地利用集積円滑化事業の趣旨が十分に理解され、地域一体となって農地利用集積円滑化事業を進めるとの合意形成が行われるよう、農地利用集積円滑化事業に関する普及啓発活動等を行うものとする。

(2) 鴻巣市、農業委員会、農業協同組合、土地改良区及び鴻巣市担い手育成協議会等は農地利用集積円滑化事業を促進するため、農地利用集積円滑化団体に対し、情報の提供及び事業の協力を行うものとする。

## 4. 農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準その他農用地利用改善事業の実施の基準に関する事項

### (1) 農用地利用改善事業の実施の促進

鴻巣市は、地域関係農業者等が農用地の有効利用及び農業経営の改善のために行う自主努力を助長するため、地域関係農業者等の組織する団体による農用地利用改善事業の実施を促進する。

### (2) 区域の基準

農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準は、土

地の自然的条件、農用地の保有及び利用の状況、農作業の実施状況、農業経営活動の領域等の観点から、農用地利用改善事業を行うことが適当であると認められる区域（1～数集落）とするものとする。

ただし、土地の自然的条件、農用地の保有及び利用の状況、農作業の実施の状況、農業経営活動の領域等から一の集落を単位とした区域を実施区域とすることが困難である場合にあっては、農用地の効率的かつ総合的な利用に支障を来さない場合に限り、集落の一部を除外した区域を実施区域とすることができるものとする。

### （3）農用地利用改善事業の内容

農用地利用改善事業の主要な内容は、（2）に規定する区域内の農用地の効率的かつ総合的な利用を図るための、作付地の集団化、農作業の効率化その他の措置及び農用地の利用関係の改善に関する措置を推進するものとする。

### （4）農用地利用規程の内容

- ① 農用地利用改善事業の準則となる農用地利用規程においては、次に掲げる事項を定めるものとする。
  - ア. 農用地の効率的かつ総合的な利用を図るための措置に関する基本的な事項
  - イ. 農用地利用改善事業の実施区域
  - ウ. 作付地の集団化その他農作物の栽培の改善に関する事項
  - エ. 認定農業者とその他の構成員との役割分担その他農作業の効率化に関する事項
  - オ. 認定農業者に対する農用地の利用の集積の目標その他農用地の利用関係の改善に関する事項
  - カ. その他必要な事項
- ② 農用地利用規程においては、①に掲げるすべての事項についての実行方策を明らかにするものとする。

### （5）農用地利用規程の認定

- ① （2）に規定する区域をその区域とする地域関係農業者等の組織する団体で、定款又は規約及び構成員につき法第23条第1項に規定する要件を備えるものは、基本要綱様式第4号の認定申請書を鴻巣市に提出して、農用地利用規程について鴻巣市の認定を受けることができる。
- ② 鴻巣市は、申請された農用地利用規程が次に掲げる要件に該当するときは法第23条第1項の認定をする。
  - ア. 農用地利用規程の内容が基本構想に適合するものであること。
  - イ. 農用地利用規程の内容が農用地の効率的かつ総合的な利用を図るために適切なものであること。
  - ウ. （4）の①のエに掲げる役割分担が認定農業者の農業経営の改善に資するものであること。

エ. 農用地利用規程が適正に定められており、かつ、申請者が当該農用地利用規程で定めるところに従い農用地利用改善事業を実施する見込みが確実であること。

③ 鴻巣市は、②の認定をしたときは、その旨及び当該認定に係る農用地利用規程を鴻巣市の掲示板への掲示により公告する。

④ ①から③までの規定は、農用地利用規程の変更についても準用する。

#### (6) 特定農業法人を定める農用地利用規程の認定

① (5)の①に規定する団体は、農用地の保有及び利用の現況及び将来の見通し等から見て農用地利用改善事業が円滑に実施されないと認めるときは当該団体の地区内の農用地の相当部分について農業上の利用を行う効率的かつ安定的な農業経営を育成するという観点から、特定農業法人の同意を得て、農用地利用規程において定めることができる。

② ①の規定により定める農用地利用規程においては、(4)の①に掲げる事項のほか、次の事項を定めるものとする。

ア. 特定農業法人の名称及び所在地

イ. 特定農業法人に対する農用地の利用の集積の目標

ウ. 特定農業法人に対する農用地の利用権の設定及び農作業の委託に関する事項

③ 鴻巣市は、②に規定する事項が定められている農用地利用規定について(5)の①の認定の申請があった場合において、農用地利用規定の内容が(5)の②に掲げる要件のほか、次に掲げる要件に該当するときは、(5)の①の認定をする。

ア. ②のイに掲げる目標が(2)に規定する区域内の農用地の相当部分について利用の集積をするものであること。

イ. 申請者の構成員からその所有する農用地について利用権の設定又は農作業の委託を行いたい旨の申出があった場合に、特定農業法人が当該申出に係る農用地について、利用権の設定等若しくは農作業の委託を受けること、又は特定農業法人が当該申出に係る農用地について農作業の委託を受けることが確実であると認められること。

④ ②で規定する事項が定められている農用地利用規程（以下「特定農用地利用規程」という。）で定められた特定農業法人は、認定農業者と、特定農用地利用規程は、法第12条第1項の認定に係る農業経営改善計画とみなす。

#### (7) 農用地利用改善団体の勧奨等

① (5)の②の認定を受けた団体（以下「認定団体」という。）は、当該認定団体が行う農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の効率的かつ総合的な利用を図るため特に必要があると認められるときは、その農業上の利用の程度がその周辺の当該区域内における農用地の利用の規定に比べ、著しく劣っていると認められる農用地について、当該農用地の所有者（所有者以外に権原に基づき使用及び収益をする者がある場合には、その者）である当該認定団体の構成員に対し、認定農業者（特

定農用地利用規程で定めるところに従い、農用地利用改善事業を行う認定団体にあつては、当該特定農用地利用規程で定められた特定農業法人を含む。)に利用権の設定等又は農作業の委託を行うよう推奨することができる。

- ② ①の勧奨は、農用地利用規程に基づき実施するものとする。
- ③ 特定農用地利用規程で定められた特定農業法人は、当該特定農用地利用規程で定められた農用地利用改善事業の実施区域内にその農業上の利用の程度がその周辺の当該区域内における農用地の利用の程度に比べ、著しく劣っていると認められる農用地がある場合には、当該農用地について利用権の設定等又は農作業の委託を受け、当該区域内の農用地の効率的かつ総合的な利用を図るよう努めるものとする。

#### (8) 農用地利用改善事業の指導、援助

- ① 鴻巣市は、認定団体が農用地利用改善事業を円滑に実施できるよう必要な指導、援助に努める。
- ② 鴻巣市は、(5)の①に規定する団体又は当該団体になろうとするものが、農用地利用改善事業の実施に関し、さいたま農林振興センター、農業委員会、農業協同組合、農地中間管理機構、農地利用集積円滑化団体等の指導、助言を求めてきたときは、鴻巣市担い手育成協議会との連携を図りつつ、これらの機関・団体が一体となって総合的・重点的な支援・協力が行われるように努める。

### 5. 農業協同組合が行う農作業の委託のあっせんの促進その他の委託を受けて行う農作業の実施の促進に関する事項

#### (1) 農作業の受委託の促進

鴻巣市は、次に掲げる事項を重点的に推進し、農作業の受委託を組織的に促進する上で必要な条件の整備を図る。

- ア. 農業協同組合のその他農業に関する団体による農作業受委託のあっせんの促進
- イ. 効率的な農作業の受託事業を行う生産組織又は農家群の育成
- ウ. 農作業、農業機械利用の効率化等を図るため農作業受託の促進の必要性についての普及啓発
- エ. 農用地利用改善事業を通じた農作業の効率化のための措置と農作業の組織的な促進措置との連携の強化
- オ. 地域及び作業ごとの事情に応じた部分農作業受委託から全面農作業受委託、さらには利用権の設定への移行の促進
- カ. 農作業の受託に伴う労賃、機械の償却等の観点からみた適正な農作業受託料金の基準の設定

#### (2) 農業協同組合による農作業の受委託のあっせん等

農業協同組合は、農業機械銀行の活用、農作業受委託のあっせん窓口の開設等を通じて、農作業の受託又は、委託を行おうとする者から申出があった場合は、農作業の

受委託についてあっせんに務めるとともに、農作業の受託を行う農業者の組織化の推進、共同利用機械施設の整備等により農作業の受委託の促進に努めるものとする。

6. 農業経営の改善を図るために、必要な農業従事者の養成及び確保の推進に関する事項
- 鴻巣市は、効率的かつ安定的な経営を育成するために、生産方式の高度化や経営管理の複雑化に対応した高い技術を有した人材の育成に取り組む。このため、人材育成方針を定めるとともに、意欲と能力のある者が幅広くかつ円滑に農業に参入し得るように相談機能の一層の充実、先進的な法人経営等での実践的研修、農地利用集積円滑化団体の保有農地を利用した実践的研修、担い手としての女性の能力を十分に発揮させるための研修を通じて経営を担う人材の育成を積極的に推進する。

また、農業従事者の安定的確保を図るため、他産業に比べて遅れている農業従事の態様等の改善に取り組むこととし、休日制、ヘルパー制度の導入や、高齢者、非農家等の労働力の活用システムを整備する。

7. 新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保に関する事項

第1の6(2)に掲げる目標を長期的かつ計画的に達成していくため、関係機関・団体との連携のもと、次の取組を重点的に推進する。

- (1) 新たに農業経営を営もうとする青年等の確保に向けた取組

ア 受入環境の整備

青年農業者等育成センターやさいたま農林振興センター、さいたま農業協同組合・ほくさい農業協同組合等と連携しながら、就農相談会を開催し、就農希望者に対し、市内での就農に向けた研修等の情報提供を行う。また、市内の農業法人や先進農家等と連携して、高校や大学等からの研修やインターンシップの受入れを推進する。

イ 中長期的な取組

生徒・学生が農業に関心を持ち、農業が将来の進路の選択肢の一つとなるよう教育機関や教育委員会と連携しながら、各段階の取組を実施する。具体的には、生産者との交流の場の提供や、農業体験ができる仕組みをつくることで、農業に関する知見を広められるようにする。

- (2) 新たに農業経営を営もうとする青年等の定着に向けた取組

ア 農業者に関する情報の共有と一貫した指導支援

鴻巣市が主体となって埼玉県農業大学校やさいたま農林振興センター、農業委員会、さいたま農業協同組合、ほくさい農業協同組合の農産物生産組合等と連携・協力して「営農指導カルテ」を作成し、研修や営農指導の時期・内容などの就農前後のフォローアップの状況等を記入・共有しながら、巡回指導の他、年に1回は面接を行うことにより、当該青年等の営農状況を把握し、支援を効率的かつ適切に行うことができる仕組みをつくる。

イ 就農初期段階の地域全体でのサポート

新規就農者が地域内で孤立することのないよう、人・農地プランの作成・見直しの話し合いを通じ、地域農業の担い手として当該者を育成する体制を強化する。そのため鴻巣市担い手育成協議会との交流の機会を設け、さいたま農業協同組合、ほくさい農業協同組合、農業委員会、鴻巣市商工会、鴻巣市観光協会とも連携して、農産物直売所への出荷のためのアドバイスを行うなどして、生産物の販路の確保を支援する。

#### ウ 経営力の向上に向けた支援

アに掲げる「営農指導カルテ」を活用した指導に限らず、さいたま農業協同組合、ほくさい農業協同組合等が運営する農産物直売施設への出荷の促進、他産業の経営ノウハウを習得できる交流研修等の機会の提供などにより、きめ細やかな支援を実施する。

#### エ 青年等就農計画作成の促進及び指導と農業経営改善計画作成への誘導

青年等が就農する地域の人・農地プランとの整合に留意しつつ、本構想に基づく青年等就農計画作成を促し、青年就農給付金や青年等就農資金、経営体育成支援事業等の国の支援策や県の新規就農関連事業を効果的に活用しながら経営力を高め、確実な定着へと導く。さらに、青年等就農計画の達成が見込まれる者については、引き続き農業経営改善計画の策定を促し、認定農業者へと誘導する。

### (3) 関係機関等の役割分担

就農に向けた情報提供及び就農相談については青年農業者等育成センター、技術や経営ノウハウについての習得については埼玉県農業大学校等、就農後の営農指導等フォローアップについてはさいたま農林振興センター、農業協同組合、認定農業者、農地の確保については農業委員会、農地中間管理機構など、各組織が役割を分担しながら各種取組を進める。

## 8. その他農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項

### (1) 農業経営基盤の強化を促進するために必要なその他の関連施設との連携

鴻巣市は、1 から 5 までに掲げた事項の推進にあたっては、農業経営基盤の強化の促進に必要な以下の関連施設との連携に配慮するものとする。

### (2) 推進体制等

#### ①事業推進体制等

鴻巣市は、農業委員会、さいたま農林振興センター、農業協同組合、土地改良区、農用地利用改善団体、農地利用集積円滑化団体、鴻巣市担い手育成協議会、その他の関係団体と連携しつつ、農業経営基盤強化の促進方策について検討するとともに、今後10年にわたり第1、第3で掲げた目標や第2の指標で示される効率的かつ安定的な経営の育成に資するための実現方策等について、各関係機関・団体別の行動計画を樹立する。

また、このような長期行動計画と併せて、年度別活動計画において当面行うべき

対応を各関係機関・団体別に明確化し、関係者が一体となって合意の下に効率的かつ安定的な経営の育成及びこれらへの農用地利用の集積を協力を推進する。

## ②農業委員会等の協力

農業委員会、農業協同組合、土地改良区及び農地利用集積円滑化団体は、農業経営基盤強化の円滑な実施に資することとなるよう、鴻巣市担い手育成協議会のもとで相互に連携を図りながら協力するように努めるものとし、鴻巣市は、このような協力の推進に配慮する。

## 第6 農地利用集積円滑化事業に関する事項

### 1 農地利用集積円滑化事業を行う者に対する事項

鴻巣市においては、認定農業者等への農地の利用集積が進んできているが、経営農地は比較的分散傾向にあり、農作業の効率化等が図られず、担い手の更なる規模拡大が停滞している。

また、今後は更に農業従事者の高齢化が進んでいくことが予想され、このままでは担い手が受けきれない農地が出てくることが予想される。

農用地利用集積円滑化事業の実施主体は、こうした課題を的確に解決できる者、具体的には、①担い手の育成・確保、担い手に対する農地の利用集積の積極的な取組を実施していること、②担い手に関する情報や、農地の利用に関する今後の意向等の農地の各種情報に精通していること、③農地の出し手や受け手と積極的に関わり合い、農地の利用調整活動を実施する体制が整備されていること、等の条件を満たす者が実施するものとする。

### 2 農地利用集積円滑化事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準

① 原則として鴻巣市における農地利用集積円滑化事業の実施の単位として適当であると認められる区域は鴻巣市全域とする。

ただし、市街化区域（都市計画法（昭和43年法律第100号）第7条第1項の市街化区域と定められた区域で同法第23条第1項の規定による協議が調ったもの（当該区域以外の区域に存する農用地と一体として農業上の利用が行われている農用地の存する区域を除く。））及び農業上の利用が見込めない森林地域等は除く。

② なお、鴻巣市を複数に区分して農地利用集積円滑化事業を実施する場合、土地の自然的条件、農業者の農用地の保有及び利用の状況、農作業の実施状況等を考慮し、大字単位等とするなど、担い手への農地の面的集積が効率的かつ安定的に図られる、一定のまとまりのある区域を実施の単位とする。

### 3 その他農地利用集積円滑化事業の実施の基準に関する事項

#### (1) 農地利用集積円滑化事業規程の具体的な内容

農地利用集積円滑化事業規程には、次に掲げる事項のうち事業実施に必要な事

項を定めるものとする。

- ① 農地所有者代理事業の実施に関する次に掲げる事項
  - ア 農用地等の所有者の委任を受けて、その者を代理して行う農用地等の売渡し、貸付け又は農業の経営若しくは農作業の委託に関する事項(当該委任に係る農用地等の保全のための管理に関する事項を含む)
  - イ その他農地所有者代理事業の実施方法に関する事項
- ② 農地売買等事業の実施に関する次に掲げる事項
  - ア 農用地等の買入れ及び借受けに関する事項
  - イ 農用地等の売渡し及び貸付けに関する事項
  - ウ 農用地等の管理に関する事項
  - エ その他農地売買等事業の実施方法に関する事項
- ③ 研修等事業の内容及び当該事業の実施に関する事項
- ④ 事業実施地域に関する事項
- ⑤ 事業実施地域が重複する他の農地利用集積円滑化団体並びに農地中間管理機構、埼玉県農業委員会ネットワーク機構、農業委員会等の関係機関及び関係団体との連携に関する事項
- ⑥ その他農地利用集積円滑化事業の実施方法に関する事項

## (2) 農地利用集積円滑化事業規程の承認

- ① 法第4条第3項各号に掲げる者(市町村を除く)は、2に規定する区域を事業実施地域として農地利用集積円滑化事業の全部又は一部を行おうとするときは、規則第12条の10に基づき、鴻巣市に農地利用集積円滑化事業規程の承認申請を行い、鴻巣市から承認を得るものとする。
- ② 鴻巣市は、申請された農地利用集積円滑化事業規程の内容が、次に掲げる要件に該当するものであるときは、①の承認をするものとする。
  - ア 基本構想に適合するものであること。
  - イ 事業実施地域の全部又は一部が既に農地利用集積円滑化事業を行っている者の事業実施地域と重複することにより当該重複する地域における農用地の利用の集積を図る上で支障が生ずるものでないこと。
  - ウ 認定農業者が当該認定に係る農業経営改善計画に従って行う農業経営の改善に資するよう、農地利用集積円滑化事業を実施すると認められること。
  - エ 次に掲げるもののほか、農地利用集積円滑化事業を適正かつ確実に実施すると認められるものであること。
    - (ア) 農用地の利用関係の調整を適確に行うための要員を有していること。
    - (イ) 農地所有者代理事業を行う場合には、その事業実施地域に存する農用地等の所有者からその所有する農用地等について農地所有者代理事業に係る委任契約の申込みがあったときに、正当な理由なく当該委任契約の締結を

拒まないことが確保されていること。

(ウ) 農地利用集積円滑化事業を行うに当たって、効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積を適確に図るための基準を有していること。

(エ) (ア)から(ウ)に掲げるもののほか、農地利用集積円滑化事業を適正かつ確実に実施すると認められるものであること。

(オ) 農地利用集積円滑化事業を行うに当たって、事業実施地域が重複する他の農地利用集積円滑化団体並びに農地中間管理機構、埼玉県農業委員会ネットワーク機構、鴻巣市農業委員会等の関係機関及び関係団体の適切な連携が図られると認められるものであること。

(カ) 農業用施設の用に供される土地又は開発して農業用施設の用に供する土地とすることが適当な土地につき農地所有者代理事業及び農地売買等事業を実施する場合における農業用施設は、規則第10条第2号イからニまでに掲げるものであること。

(キ) 規則第10条第2号イからニまでに掲げる農業用施設の用に供される土地又は開発して当該農業用施設の用に供される土地とすることが適当な土地について、農地所有者代理事業及び農地売買等事業を実施する場合には、農用地につき実施するこれらの事業と併せて行うものであること。

③ 鴻巣市は、農地売買等事業に関する事項が定められた農地利用集積円滑化事業規程について①の承認をしようとするときは、あらかじめ、農業委員会の決定を経るものとする。

④ 鴻巣市は、①の承認を行ったときは、その旨並びに当該承認に係る農地利用集積円滑化事業の種類及び事業実施地域を鴻巣市の公報等への記載により公告する。

⑤ ①から④までの規定は、農地利用集積円滑化事業規程の変更の承認について準用する。

⑥ ①、③及び④の規定は、農地利用集積円滑化事業規程の廃止の承認について準用する。

### (3) 農地利用集積円滑化事業規程の取消し等

① 鴻巣市は、農地利用集積円滑化事業の適正な運営を確保するため必要があると認めるときは、農地利用集積円滑化団体に対し、その業務又は資産の状況に関し必要な報告をさせるものとする。

② 鴻巣市は、農地利用集積円滑化事業の運営に関し改善が必要であると認めるときは、農地利用集積円滑化団体に対し、その改善に必要な措置をとるべきことを命ずるものとする。

③ 鴻巣市は、農地利用集積円滑化団体が次に掲げる事項のいずれかに該当するときは、(2)の①の規定による承認を取消することができる。

ア 農地利用集積円滑化団体が法第4条第3項第1号に規定する農業協同組合若しくは一般社団法人又は一般財団法人、同項第2号に掲げる者（農地売買等事業を行っている場合にあつては、当該農業協同組合若しくは一般社団法人又は一般財団法人）でなくなったとき。

イ 農地利用集積円滑化団体が①の規定による報告をせず、又は虚偽の報告をしたとき。

ウ 農地利用集積円滑化団体が②の規定による命令に違反したとき。

④ 鴻巣市は、③の規定により承認を取消したときは、遅滞なく、その旨を鴻巣市の公報等への記載により公告する。

(4) 鴻巣市が農地利用集積円滑化事業を実施する場合は、次に掲げる規定に農地利用集積円滑化事業規程を定めるものとする。

① 鴻巣市は、必要に応じ、農地利用集積円滑化事業規程を定め、2に規定する区域を事業実施地域として農地利用集積円滑化事業の全部又は一部を行うことができるものとする。

② 鴻巣市が①の規定により農地利用集積円滑化事業規程を定めようとするときは、鴻巣市長は、当該農地利用集積円滑化事業規程を2週間公衆の縦覧に供するものとする。この場合、あらかじめ縦覧の開始の日、場所及び時間を公告する。

③ ①に規定する農地利用集積円滑化事業規程は、(2)の②に掲げる要件に該当するものとする。

④ 鴻巣市は、農地売買等事業に関する事項をその内容に含む農地利用集積円滑化事業規程を定めようとするときは、あらかじめ農業委員会の決定を経るものとする。

⑤ 鴻巣市は、農地利用集積円滑化事業規程を定めたときは、その旨並びに当該農地利用集積円滑化事業規程で定めた農地利用集積円滑化事業の種類及び事業実施地域を鴻巣市の公報等への記載により公告する。

⑥ ④及び⑤の規定は、農地利用集積円滑化事業規程の変更又は廃止について準用する。

(5) 農地利用集積円滑化事業による農用地の集積の相手方

認定農業者等農業経営の改善に意欲的な経営体を集積の相手方とするが、当該経営体のうち、経営農地の立地状況を勘案して、集積対象となる農用地を最も有効に活用することのできる者を優先する。

(6) 農地所有者代理事業における委任・代理の考え方

① 農地所有者代理事業を実施する場合には、農用地の効果的な面的集積を確保する観点から、農用地等の所有者は、委任契約に係る土地についての貸付け等の相手方を指定することはできないものとする。

② 農地所有者代理事業を実施する場合には、「農地法等の一部を改正する法律による農業経営基盤強化促進法の一部改正について」（平成21年12月11日付け21経営第4531号経営局長通知）第1の2の(6)のアの(ウ)に定める契約書例を参考に契約書を作成し、農用地等の貸付け等の委任を申し込んだ農用地等の所有者と契約を締結するものとする。

③ 前項の委任契約の締結に当たっては、次に掲げる事項について留意するものとする。

ア 農地所有者代理事業の効率的な実施の確保、契約当事者間の紛争の防止等の観点から、委任事務及び代理権の範囲については、農用地等の所有者が農地利用集積円滑化団体に委任する内容に則して定めるものとする。

イ 所有権の移転をする場合の対価、賃借権を設定する場合の賃借権の存続期間及び借賃並びに農業経営又は農作業の委託をする場合の当該委託の存続期間及び委託料金については、農用地等の所有者が申し出た内容を基に、農地利用集積円滑化団体が委任契約に基づいて交渉する貸付け等の相手方と協議し、貸付け等の内容が農用地等の所有者が申し出た内容と異なる場合には、農用地等の所有者の同意を得る旨の定めをすることが望ましい。

ウ 受任した農用地等の貸付け等の相手方が替わっても、当該農用地等の所有者に代理して新たな相手方との貸付け等の契約が締結できるよう、委任契約の期間はできる限り長期とすることが望ましい。

④ 農地利用集積円滑化団体は、農用地等の所有者から当該事業に係る委任契約の申込を受けた場合は、正当な事由がなければ委任契約の契約を拒んではならない。

⑤ 農地利用集積円滑化団体が、農用地等の保全のための管理を行う事業を実施する場合には、農用地等の所有者と書面による農作業等の受委託の契約を締結して行うものとする。

この場合、当該団体は、農用地等の保全のための管理作業について、他の者に再委託しても差し支えない。

#### (7) 農地売買等事業における農用地等の買入れ、売渡し等の価格設定の基準

① 農地売買等事業の実施に当たって、農地利用集積円滑化団体が売買する農用地等の価格については、近傍類似の農用地等に係る取引価格等を参考に定めるものとする。

② 農地売買等事業の実施に当たって、農地利用集積円滑化団体が貸借する農用地等の借賃については、農地法第52条の規定により農業委員会が提供している借賃等の情報を十分考慮して定めるものとする。

#### (8) 研修等事業の実施に当たっての留意事項

① 農地利用集積円滑化団体は、新規就農者等に対する農業の技術、経営の方法の

実地研修等を目的とする研修等事業を行う場合には、通常管理耕作の範囲を超えて、作目、栽培方法の選択、農用地等の形質の変更等を行うことができるものとする。

- ② 研修の実施期間は、新規就農希望者の年齢、農業の技術等の習得状況に応じ、概ね5年以内とする。ただし、農地利用集積円滑化団体が借り入れた農用地等において研修等事業を行う場合には、研修等事業の実施期間は当該農用地等の借入れの存続期間内とする。
- ③ 研修等事業の実施に当たって、当該団体は、さいたま農林振興センター、埼玉県農業大学校、埼玉県農業委員会ネットワーク機構、農業協同組合、地域の農業者等と連携して行うとともに、農業技術等を効率的に習得することができるよう努めるものとする。

(9) 他の関係機関及び関係団体との連携に関する事項

農地利用集積円滑化団体は、多数の農用地等の所有者が農地利用集積円滑化事業を活用できるよう、農業委員会、農業協同組合、さいたま農林振興センター等の関係機関及び関係団体と連携して、農用地等の所有者、経営体に対し、農地利用集積円滑化事業のパンフレットの配布、説明会の開催等を通じた普及啓発活動に努める。

第7 その他

この基本構想に定めるもののほか、農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項については、別に定めるものとする。

附則

- 1. この基本構想は、平成 7年 3月 31日から施行する。
- 1. この基本構想は、平成14年12月19日から施行する。
- 1. この基本構想は、平成18年 7月 1日から施行する。
- 1. この基本構想は、平成22年 6月 9日から施行する。
- 1. この基本構想は、平成26年 9月 26日から施行する。
- 1. この基本構想は、平成28年12月 9日から施行する。

## 別紙1（第4の1（1）⑥関係）

次に掲げる者が利用権の設定等を受けた後において、法第18条第2項第2号に規定する土地（以下「対象土地」という。）の用途ごとにそれぞれ定める要件を備えている場合には、利用権の設定等を行うものとする。

- (1) 地方自治法（昭和22年法律第67号）第298条第1項の規定による地方開発事業団体以外の地方公共団体（対象土地を農業上の利用を目的とする用途たる公用又は公共用に供する場合に限る。）、農業協同組合等（農地法施行令（昭和27年政令第445号）第6条第2項第1号に規定する法人をいい、当該法人が対象土地を直接又は間接の構成員の行う農業に必要な施設の用に供する場合に限る。）又は畜産公社（農地法施行令第6条第2項第3号に規定する法人をいい、当該法人が同号に規定する事業の運営に必要な施設の用に供する場合に限る。）
- 対象土地を農用地（開発して農用地とすることが適当な土地を開発した場合におけるその開発後の農用地を含む。）として利用するため利用権の設定等を受ける場合
    - ・・・法第18条第3項第2号イに掲げる事項
  - 対象土地を農業用施設用地（開発して農業用施設用地とすることが適当な土地を開発した場合におけるその開発後の農業用施設用地を含む。以下同じ。）として利用するための利用権の設定等を受ける場合
    - ・・・その土地を効率的に利用することができることと認められること
- (2) 農業協同組合法第72条の8第1項第2号の事業を行う農事組合法人（農地所有適格法人である場合を除く。）又は生産森林組合（森林組合法（昭和53年法律第36号）第93条第2項第2号に掲げる事業を行うものに限る。）（それぞれ対象土地を農用地以外の土地としてその行う事業に供する場合に限る。）
- 対象土地を混牧林地として利用するため利用権の設定等を受ける場合
    - ・・・法第18条第3項第2号ハに掲げる要件
  - 対象土地を農業用施設用地として利用するため利用権の設定等を受ける場合
    - ・・・その土地を効率的に利用して耕作又は養畜の事業を行うことができると認められること。
- (3) 土地改良法（昭和24年法律第195号）第2条第2項各号に掲げる事業（同法第6号に掲げる事業を除く。）を行う法人又は農業近代化資金融通法施行令（昭和36年政令第346号）第1条第7号若しくは第8号に掲げる法人（それぞれ対象土地を当該事業に供する場合に限る。）
- 対象土地を農業用施設用地として利用するため利用権の設定等を受ける場合
    - ・・・その土地を効率的に利用することができることと認められること

## 別紙2（第4の1（2）関係）

I 農用地（開発して農用地とすることが適当な土地を含む。）として利用するための利用権（農業上の利用を目的とする賃借権又は使用貸借による権利に限る。）の設定又は移転を受ける場合

### ①存続期間（又は残存期間）

1. 存続期間は3年から10年（農業者年金制度関連の場合は10年、開発して農用地とすることが適当な土地について利用権の設定等を行う場合は、開発してその効用を発揮する上で適切と認められる期間その他利用目的に応じて適切と認められる一定の期間）とし、可能な範囲で長期的なものとする。
2. 残存期間は、移転される利用権の残存期間とする。
3. 農用地利用集積計画においては、利用権設定等促進事業の実施により設定（又は移転）される利用権の当事者が当該利用権の存続期間（又は残存期間）の中途において解約する権利を有しない旨を定めるものとする。

### ②賃借の算定基準

1. 農地については、農地法第52の規定により農業委員会から提供される賃借料情報等を十分考慮し、当該農地の生産条件等を勘案して算定する。
2. 採草放牧地については、その採草放牧地の近隣の採草放牧地の借賃の額に比準して算定し、近隣の借賃がないときは、その採草放牧地の近隣の農地について算定される借賃の額を基礎とし、当該採草放牧地の生産力、固定資産評価額等を勘案して算定する。
3. 開発して農用地とすることが適当な土地については、開発後の土地の借賃の水準、開発費用の負担区分の割合、通常の実産力を発揮するまでの期間等を総合的に勘案して算定する。
4. 借賃を金銭以外のものとする場合には、その借賃は、それを金額に換算した額が、上記1から3までの規定によって算定される額に相当するように定めるものとする。

この場合において、その金銭以外のものとする借賃の支払い等の定めは、農業委員会が定める農地法第21条第1項ただし書の承認基準に適合するものでなければならないものとする。

### ③借賃の支払方法

1. 借賃は、毎年農用地利用集積計画に定める日までに当該年に係る借賃の全額を一時に支払うものとする。
2. 1の支払いは、賃貸人の指定する農業協同組合等の金融機関の口座に振り込むことにより、その他の場合は、賃貸人の住所に持参して支払うものとする。

3. 借賃を金銭以外の物で定めた場合には、原則として毎年一定の期日までに当該年に係る借賃の支払い等を履行するものとする。

④有益費の償還

1. 農用地利用集積計画においては、利用権設定等促進事業の実施により利用権の設定（又は移転）を受ける者は、当該利用権に係る農用地を返還するに際し民法の規定により当該農用地の改良のために費やした金額その他の有益費について償還を請求する場合その他法令による権利の行使である場合を除き、当該利用権の設定者に対し名目のいかんを問わず、返還の代償を請求してはならない旨を定めるものとする。

2. 農用地利用集積計画においては、利用権設定等促進事業の実施により利用権の設定（又は移転）を受ける者が当該利用権に係る農用地を返還する場合において、当該農用地の改良のために費やした金額又はその時における当該農用地の改良による増価格について、当該利用権の当事者間で協議が整わないときは、当事者の双方の申出に基づき鴻巣市が認定した額をその費やした金額又は増価格とする旨を定めるものとする。

II 混牧林地又は農業用施設用地（開発して農業用施設用地とすることが適当な土地を含む。）として利用するための利用権（農業上の利用を目的とする賃借権又は使用貸借による権利に限る。）の設定又は移転を受ける場合

①存続期間（又は残存期間）

Iの①に同じ。

②借賃の算定基準

1. 混牧林地については、その混牧林地の近傍の混牧林地の借賃の額、放牧利用の形態、当事者双方の受益又は負担の程度等を総合的に勘案して算定する。

2. 農業用施設用地については、その農業用施設用地の近傍の農業用施設用地の借賃の額に比準して算定し、近傍の借賃がないときは、その農業用施設用地の近傍の用途が類似する土地の借賃の額、固定資産税評価額等を勘案して算定する。

3. 開発して農業用施設用地とすることが適当な土地については、Iの②の3と同じ。

③借賃の支払い方法

Iの③に同じ。

④有益費の償還

Iの④に同じ。

III 農業の経営の委託を受けることにより取得される使用及び収益を目的とする権利の設定を受ける場合

①存続期間

Iの①に同じ。

②損益の算定基準

1. 作目等毎に、農業の経営の委託に係る販売額（共済金を含む。）から農業の経

営に係る経費を控除することにより算定する。

2. 1の場合において、受託経費の算定に当たっては、農業資材費、農業機械施設の償却費、事務管理費等のほか、農作業実施者又は農業経営受託者の適正な労賃・報酬が確保されるようにするものとする。

#### ③損益の決済方法

Iの③に同じ。この場合においてIの③中「借賃」とあるのは「損益」と、「賃貸人」とあるのは「委託者（損失がある場合には、受託者という。）」と読み替えるものとする。

#### ④有益費の償還

Iの④に同じ。

### IV 所有権の移転を受ける場合

#### ①対価の算定基準

土地の種類及び農業上の利用目的毎にそれぞれ近傍類似の土地の通常取引（農地転用のために農地を売却した者が、その農地に代わるべき農地の所有権を取得するため高額の対価により行う取引その他特殊な事情の下で行われる取引を除く。）の価格に比準して算定される額を基準とし、その生産力等を勘案して算定する。

#### ②対価の支払方法

農用地利用集積計画に定める所有権の移転の対価の支払期限までに所有権の移転を受ける者が所有権の移転を行う者の指定する農業協同組合等の金融機関の口座に振り込むことにより、又は所有権の移転を行う者の住所に持参して支払うものとする。

出資を目的とする所有権移転の場合は、所有権の移転を受けた農地所有適格法人の取締役又は理事は所要の手続きを経て設立又は変更の登記を行うものとする。

#### ③所有権の移転の時期

農用地利用集積計画に定める所有権の移転の対価の支払期限までに対価の全部の支払いが行われたときは、当該農用地利用集積計画に定める所有権の移転の時期に所有権は移転し、対価の支払期限までに対価の全部の支払いが行われなときは、当該所有権の移転に係る農用地利用集積計画に基づく法律関係は失効するものとする。